



例年よりもかなり早い梅雨明けで、蟬の鳴き声も聞こえ始めたばかりです。まだニイニイゼミが中心ですが、そのうちにアブラゼミやミンミンゼミに代わっていくでしょう。

学校・子どもたちが見た戦争 その1

この夏は第二次世界大戦が終了して77年になります。この間、日本が直接戦争に加わったり戦場になることは幸いにしてありませんでしたが、世界の各地では今なお戦火が収まることはありません。学校や子どもたちから見たかつての世界大戦がどのようなものであったのか、**市域の史料(越ヶ谷高等女学校に通ったAさんの話、県立越ヶ谷高校創立60周年記念誌、市立越ヶ谷小学校と西中学校の資料 等)**を中心に今号と次号(終戦 戦後)でお伝えしたいと思います。

募る閉塞感 (戦争の激化)

AさんがB町で生まれた昭和8年(1933年)は、日本はすでに満州事変を起こして国際連盟から脱退した年でした。4年後には日中戦争となり、さらにその2年後にはナチス・ドイツが第二次世界大戦を引き起こしていきました。そして昭和16年(1941年)、日本は中国との戦争を継続したままで新たにアメリカ、イギリスなどとの太平洋戦争に入って行きました。この頃から世の中には『鬼畜米英』や『欲しがりません、勝つまでは』などの標語があちこちで聞かれるようになり、Aさんは「カタカナ語を言えなくなりました」と振り返っています。「フォーク」や「ナイフ」のような語は勿論、野球用語も「ストライク1(ワン)」は「よし1本」、「ファウル」は「ダメ」または「圏外」というふうになっていきました。うっかり使ってしまうと、愛国婦人会の人に厳しく注意を受けたことがあったそうです。戦争に反対する人は勿論、軍部(政府)の方針に沿わない言動は常に監視され、時には警察(特別高等警察)や憲兵(軍人だけでなく民間人も取り締まった)に通報されて逮捕されることもあったのです。

小学校にも戦争の影響

この時期の小学校は「尋常高等小学校」(義務教育の尋常科6年間、希望による高等科2年間)から「国民学校」(初等科と高等科)へと変更されました。小学校の通知表にはその変化が表れています。それは各教科の名称や区分の仕方です。教育の目的が、はっきりと国体(天皇が治める国の仕組み)を維持して戦争を進める方針に沿ったものになっていったことがわかります。

学校行事の中では「教練」(体錬)が行われるようになりました。遠足は文字通りの「遠足=行軍」でした。「越ヶ谷国民学校 校務日誌」には次のように記録されています。

昭和19年(1944年)5月8日(月):大詔奉戴日(太平洋戦争開戦記念日)
行軍1,2年生は大相模方面 3~5年生は大戸方面、6年と高等科は野田方面
6月8日(木):大詔奉戴日 行軍3,4年生は野田方面、5,6年生は吉川方面、高等科は草加方面

通知表に示された教科

◆昭和15年以前

修身(道徳のような教科)、国語、算術、国史、地理、理科、図画、唱歌、体操、手工 他

◆昭和16年以降

国民科:修身、国語、国史、地理

理科:算数、理科

体錬科:体操、武道(男子は柔剣道、女子は^{なぎなた}薙刀)

芸能科:音楽、習字、図画、工作 他



薙刀の稽古(越ヶ谷小学校蔵)

この後は学年限定で数時間、7月8日(土)、8月8日(火)、9月24日(日)に行われ、一日全校で行う行軍は昭和20年1月8日(月)が最後になりました。9月以降2回しか行われなくなったことをこの日誌から探ると、その理由の一つに米軍機攻撃による「警戒警報」と「空襲警報」が急増していったことが考えられます。これらの警報は多い時は一日に5~6回の時もありました。

昭和19年の「校務日誌」には、それ以前の日誌には見られなかった記録があります。宿直勤務は以前からありましたが、この頃には校長、教頭が入ることが多くなり、若手の、恐らく20歳前と思われる男性教員の中には3~4夜連続で宿直を務めることも少なくありませんでした。そして昭和20年7月からは女性教員も2名で宿直に当たるようになりました。男性教員が極端に少なかったからです。昭和20年度当初の越ヶ谷国民学校教員は校長(男性1名)、教

頭(男性1名)、男性教員3名、女性教員16名、出征中教員4名 でした。

銃後の子どもも犠牲に ~戦争の激化~

“銃後(じゅうご)”というのは戦争中の戦場ではない後方の地域やその一般市民を指す言葉です。

昭和20年(1945年)3月10日の未明には東京大空襲があり、真紅に染まった南の空が越ヶ谷からも見えたそうです。当時6年生だったAさんの9歳下の弟さんはその恐ろしさのあまり、戦後もしばらくは夕焼けを怖がったそうです。

この何日か後、Aさんは越ヶ谷高等女学校を受験しました。筆記試験は行われず、国民学校からの資料と当日の体力テスト、口頭試問だけでした。口頭試問では「今一番激しい戦場はどこか」と問われ、南方の島を答えたら「それは違う。東京だよ」と言われて落第だと思ったそうです。しかし合格率60%の難関を突破したAさんたち121名は2学級に分かれて高女(高等女学校の略)生活をスタートさせました。ところが待っていたのは**作業、勤労奉仕と空襲警報**による避難の連続でした。勉学らしいのは登校後の漢字書取小テストでした。6月からは農家に行って田植えなど農作業の勤労奉仕をするようになりました。

一日の取り組みが終わって級友と別れる時、会えるのはこれが最後になるかもしれないと思ったそうです。実際に攻撃を受けた友達もいたからです。

越ヶ谷国民学校でも作業の時間が多くなりました。当時建設中だった陸軍機用滑走路「**荻島飛行場**」の**整備作業**に高学年男子が動員されました。女子児童は**戦闘帽の通気穴を糸で**かがる作業でした。他には**干草刈りや**

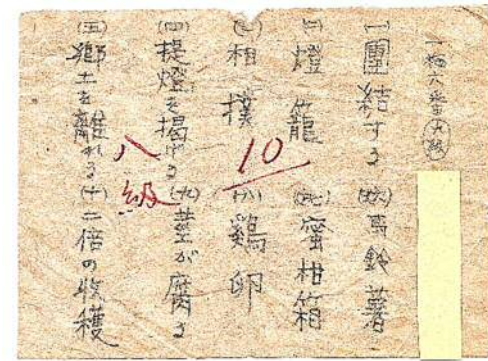


昭和20年の高等女学校生徒(個人蔵) 衣料品は店になく、家庭にあるもので間に合わせました。写真中ズボンのような「モンペ」は和服を解いて作ったそうです。

中学校、高等女学校への進学率

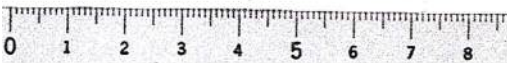
都市部では約30%、農村部では約5%、平均約11%

(『学校の歴史』(第一法規)等より)



漢字書取小テスト答案

(薄くて小さい紙片です。物が不足していました。)



農作業などがありました。秋には**イナゴ**捕りが全校挙げて行われました。一か月に5~6回行われて117貫ほど(約445kg)になり、業者が112円64銭で買い取ったことが日誌に記録されています。これは当時の校長の給料に相当する額でした。終戦の3週間前、越ヶ谷駅近くで作業の最中に電車で轢かれて落命した児童もいました。

警戒及び空襲警報と避難、作業・勤労奉仕のほか、子どもたちが授業の合間に度々参加したのがあります。**兵士壮行**(見送り)と**英霊**(戦死者)出迎えです。

校務日誌(昭和20年7月14, 15日)
(越ヶ谷小学校蔵)



深夜に米軍機攻撃の警戒警報が出た記述

昼間にも警報

女性教師が二名で宿直



兵士壮行(越ヶ谷小学校蔵)



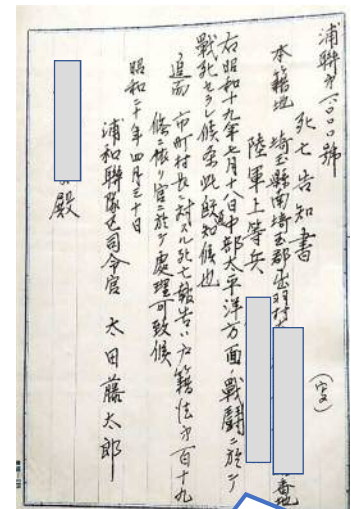
戦没兵士の村葬(越谷市教育委員会蔵) 出羽村の戦没者名簿が西中学校寄贈史料にあります。出羽国民学校で村葬が行われたからです。

荻島飛行場航空写真

現在の県立越谷西高校

滑走路(翼賛壮年団を中心に作業し、小学生が加わりました。現在は道路です。)

(国土地理院ウェブサイトより)



出羽村出身者戦死の通知(控)
(越谷市近現代資料)